

ブラジル特報



特集 アマゾン日本人移住 90 周年

- ・日本人移民を暖かく迎えたアマゾン地方
- ・西部アマゾンにおける日系移住 90 周年

あの町この町
グラマード Gramado

0円

新規会員募集中!
詳しくは P21 をご覧ください。

 一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

360° business innovation.



Photographer: Ricardo Teles / Vale



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

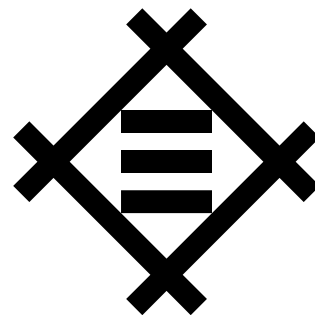
鉄鉱石を安定供給し、世界経済の発展を支える。
ヴァーレ社を通じ、世界最高水準の高品位鉄鉱石を供給。増大する鉄鋼需要に応える。

[Business innovation-2]

水力発電事業を通じ、低炭素社会へのインフラ構築に貢献。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

[Business innovation-3]

ブラジルで、そして世界へ。コーヒーと共に至福のひとつときを。
Mitsui Alimentos社を通じ、半世紀にわたり愛される「Café Brasileiro」を製造・販売。
これからも豊かな食文化をお届けする。



MITSUI & CO.

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

目次

あの町この町 グラマード [高嶋尚生]	3
ブラジル・ナウ 日本人アマゾン移住 90 周年に想う [アルフレド・ホンマ]	5
【特集】アマゾン日本人移住 90 周年 日本人移民を暖かく迎えたアマゾン地方 [堤 剛太]	6
【特集】アマゾン日本人移住 90 周年 西部アマゾンにおける日系移住 90 周年 [錦戸 健]	8
アマゾン日本人移住 90 周年記念式典 その現地日程とロゴマーク [「ブラジル特報」編集部]	10
文協会長としての抱負 [石川レナト]	11
ブラジル現地報告 ブラジル日系社会の大衆音楽～演奏者のひとりごと [川原崎隆一郎]	12
連載・日系企業シリーズ第 60 回 JTグループブラジルでの取り組み [岡田有祐] ...	13
連載・ビジネス法務の肝 債権回収のいろは [柏 健吾 / 津野マルセロ]	14
連載・税務の勘どころ Lei de Informatica (情報産業法) の改正 [ウィリアム・カレガリ/ヒカルド・ホア/吉田幸司]	15
エッセイ ブラジルに渡って40年(前編) [飯島秀昭]	16
ウーマン・アイ 一風変わった日系四世ブラジル人 [鎌田ローザ] ...	17
ジャーナリストの旅路 世代交代に想う日系人との絆 [本間圭一]	17
連載・文化評論 “ボサノヴァの神様”の死とドキュメンタリー映画 「ジョアン・ジルベルトを探して」 [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
キャンパス・コラム ベネズエラからの「留学生」 [塚本一馬]	19
新刊書紹介	20
連載・ブラジルあれこれ BRAZIL IS NOT FOR BEGINNERS	20
協会からのお知らせ	21



写真=永武ひかる
「表紙のひとつこと」

「するする木を登り、たわわに実ったアサイーフルーツを採る人。アマゾン河口のバラ州都ベレンから約 200 キロ、日本人移住地として知られるトメアスー。日本人や日系人が中心となって進めるアグロフォレストリーでも注目されている。」

(永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(備成社)等。www.hikarunagatake.com

あの町、
この町

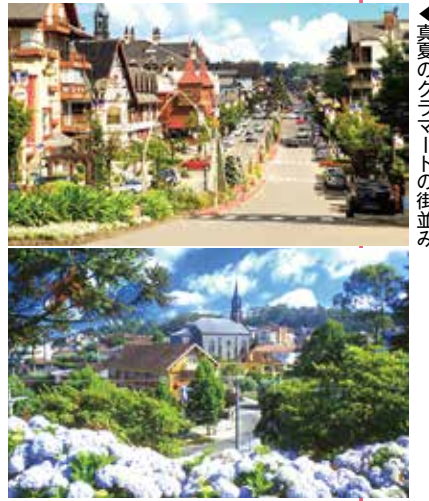
グラマード Gramado

コーヒー、サンバ、カーニバル、トロピカル、肌の色は褐色というのが一般的なブラジルのイメージだが、ブラジルの南の端に、これらのどのイメージにも当てはまらず、冬には雪も降ることがある「もう一つの国」がある。リオグランデ・ド・スール州である。実際、1835年に分離独立の乱が起こり、10年後に収まったが、現在でも州の旗には、República Rio-Grandense(リオグランデ共和国)と書かれている。

同州はヨーロッパ系の白人が8割を占める。18世紀の中頃、アゾーレス諸島のポルトガル人が移住してきたのがヨーロッパ移民の起源。19世紀に入り、ドイツ人、イタリア人家族が集団で自分たちの生まれ育ったところと似たような農村部に入植していった。

ブラジルへの帰属意識が薄く、母国の文化・伝統を守り続けたと言われている。その州都のポルトアレグレから130kmほど離れたセーハ・ガウーシャと呼ばれる山岳地域にグラマード市がある。

標高850m。人口3万人。イタリア系とドイツ系が住民の殆どを占める。ポルトアレグレから1時間半ほど車を走らせると最初に街へのゲートに着く。ゲートそのものがドイツ風。そこから、「ここが本当にブラジル？」と思わせるヨーロッパ風の建物が続く街並みの中に入って行く。真夏の12月のクリスマスシーズンにはアジサイが咲き誇り、群生して雪のように見える。街じゅうにクリスマスツリーが飾られ街をあげて Natal Luz(ナタル・ルース)というクリスマスイベントが開催される。夜には神戸ルミナリエのようなイルミネーションのほか、街じゅうが光で彩られ、まるでおとぎの国に来たよう。家族連れでにぎやかになる。真冬の8月は寒い。毎年、南米最大の映画祭が開催される。他の州から“寒さを求めて”ブラジル人観光客がやって来る。食事は一年中楽しめる。典型的なイタリア移民の家庭料理の若鶏の炭火焼き Galetto(ガレット)、ドイツの郷土料理のCafé Colonial(カフェ・コロニアル)が代表的。スイス料理のフォンデュも有名。チーズ・オイル(牛肉)フォンデュに加えチョコレートフォンデュまである。チョコレートは、地元で工場があり街のどこでも売られている。グラマードのチョコレートは全国的に人気がある。大人も子供もワクワクする街である。



真夏のグラマードの街並み



高嶋尚生(協会理事)



グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経アジアリクルーティングフォーラム

2013年8月に第1回フォーラムを開催。毎年、アジア主要国のトップクラス大学で学ぶ現地学生の日本企業就職を支援。各国での企業説明会や、日本で学ぶ外国人留学生のための就職支援など、グローバル人材を求める日本企業のニーズにお応えしています。



日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
<https://career.nikkei.co.jp/>

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。



日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES executive
<https://www.nikkeihr.co.jp/executive/>

日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日本人アマゾン移住90周年に想う

移住者を写した白黒写真や無声映画は、神戸の移民収容所、紙テープの別れ、リオ・デ・ジャネイロまたはサントスまでの50日間に及ぶ航海、そこからブラジルの船舶に乗り換えて大西洋の沿岸を航海し、アマゾン河口を内陸に入り、ベレンで船を降りるかパリンチンスまで行く航海の様子を思い起こさせる。さらに、戦後移住者は、アクレ、ロンドニアやロライマといった最も遠隔の地に降り立った。

船上の人々の笑みは、新しい土地に対する恐怖と心配の入り混じった感情を隠していた。帰りのない旅路、生きたままの埋葬。トメアスー及びパリンチンスのすべての先駆者たちはもう亡くなっており、墓地に埋葬された多くの真っ白い遺骨は無くなり、子孫のために選んだ新しい土地を肥沃にするために使われた。手紙は、届くのに50日から60日かかった。第二次大戦の空白があった。意思疎通のために日本語なまりのカポクロ化したポルトガル語が話された。子供たちが生まれ、ブラジルが新しい祖国、日本が遠い国となった。

過去を持ち出して、将来のブラジルと日本の関係を考えようとするのは、簡単ではない。アマゾンにおける日本人移住の成功は、今の時代には不可能な植民モデルだ。パラ州政府とアマゾナス州政府はトメアスーとパリンチンスに植民拠点を設けるため、それぞれ千葉県の面積の2倍にあたる100万ヘクタールを譲渡した。当時は、労働・環境法制はなく、子供の労働や人が住んでいる土地の占有に対する規制もなかった。

ジュートと胡椒の栽培導入は、パラ州及びアマゾナス州の農業を変えたが、これは多くの幸運と偶然が重なった結果だ。気が付かないままに時がカーブを描き、歴史は全く違ったものになっていたかもしれない。日本人移住者は、イギリス人が持ち去ったゴムの木と旧イギリス植民地から持ち込んだジュート及び胡椒というバイオパイラシーの交換を行ったのだ。

時が移り、ジュートの栽培は1960年代にピークを迎え、アマゾナス州のGDPの3分の1以上を生産した。胡椒の生産は、1970年代がピークで、パラ州の輸出額の35%が胡椒であった。今日では、この比率は1%にも満たないが、2015年には、新たな記録となる輸出額3億4,700万ドルに達した。ジュート及び胡椒の栽培は、ともに急速な「民主化」の過程にあり、胡椒の生産の半分は、耕地面積2ヘクタール以下の小農の手になる。

70年代以降、ブラジルの農業は大きな変革を始める。「田

舎」のブラジルは消滅し、「都会」のブラジルに場所を譲り、鋤に代わってトラクター、近代的肥料が用いられ、生産性の記録更新が続いた。ブラジルは、大豆、トウモロコシ、牛肉、鶏肉、オレンジジュース、アルコール、タバコ等の最大生産者になった。このようなブラジル農業の新しい局面における日本人移住者とその子孫のプレゼンスは、徐々に低下した。日本人移住者の勤勉や管理能力の象徴であった、コチア産業組合、南米銀行、南伯農業協同組合は2008年の日本人ブラジル移住100周年まで存続できなかった。ブラジルの革新的な大企業と企業家が政府の支援を受けることなく、ブラジル農業を世界の舞台に押し上げた。この点について、日本政府高官の演説等を聞くと、日本政府及び社会は、このようなブラジル農業の変革に日本人移住者とその子孫が参画したと誤解している。

2108年の日本人ブラジル移住200周年と2129年の日本人アマゾン移住200周年はどのようなものになるのだろうか。日本人移住者の子孫は、異人種間の結婚を通じ急速にブラジル社会に同化してきた。このスピードは、奴隷としてやってきた黒人のそれを凌ぐものである。ポルトガル系やイタリア系の名前との混交が進み、料理や武道、ブランドがますますブラジルの日常となる。出稼ぎ者の移動を伴う労働市場のグローバル化はあっても、日本人が新たにブラジルに移住することはないであろう。

ブラジルにやってきた先駆者の炎を消さないために、日本政府は知識の交流を促進すべきだ。ブラジル人学生が、日本の大学や大学院で学び、日本人学生がブラジルの大学、大学院で学ぶという知的交流により、共通の過去との絆を壊さないための文化や科学技術の平準化が促進される。

アマゾン及びブラジルにある「日本」は維持されるべきである。90周年の機会には、万華鏡のように様々なイメージが現れる。私の両親が1931年にパリンチンスに旅した姿を想像する。携帯電話やインターネット、ジェット機やコンピューターもなかった当時のアマゾン。そこではすべての者が一から始めなければならなかった。多くの者がマラリアやその他の熱帯病で死んでいった。

ブラジルは、農業大国となり、日本は、産業大国、世界第3位の経済大国だ。将来のブラジルと日本の関係は、このような両国情勢の理解、経済関係の拡大、科学技術の交流といったプロセスを踏んでいこう。

アルフレド・ホンマ

(ブラジル農牧研究公社 (EMBRAPA) 東部アマゾン支局研究員)



日本人移民を暖かく迎えたアマゾン地方



堤 剛太
(汎アマゾン日伯協会 副会長)

日本の 16 倍の面積を持つという、アマゾン河流域。この広大な北部ブラジル地方に、日本人・日系人は現在、約 5 万人が居住している。この内、アマゾン日本人移民発祥の地パラ州内には、その 80% に当たる 4 万人が生活しているのだ。

在ベレン領事事務所の資料を見ると、同州内に日本国籍を保有する者が 2347 名居る。10 年前の数字は、2486 名だからこの 10 年間で 139 名の方々が他

界されている。当地生まれで、日本国籍を保有する者もこの記録に含まれているので数字イコール一世の数とは違うがそれでも、亡くなった人のほとんどは高齢化

した一世移民であろう。パラ州に、第一回日本人移民が入ったのが丁度 90 年前の 1929 年 9 月。戦後、再びアマゾン移民が当地に入植したのは 66 年前の 1953 年 3 月。60 年代以降、集団での移民は途絶えているので現在の北伯日系社会は、一掴みの一世をピラミッドの頂点に 4 世までがすそ野を広げている様な現況である。10 年後の百周年祭時には、この頂点は槍の穂先みたいに鋭角なものになっていることであろう。

アマゾン地方と言えば、今でも未開の地のイメージが残るが 90 年前だと、人跡未踏の地として一般には知られていた筈だ。そんな辺境の地アマゾン地方を、日本政府はどうして入植地として選択しそして、開拓のための移民を大量に送りこんだのであろうか。

当時の日本国は、深刻な国内不況の上には人口過剰問題を抱えておりこれに輪を掛けるように 1923 年、関東大震災が発生している。そこで、まず国内の人口を減らす事で国を立て直す政策として取られたのが、海外へ移民を大量に送り出す事であった。この事から、1920 年代前半から日本政府は渡航費の負担までを行い、ブラジル移民を保護奨励していた。それまでの、日本人移民の主な受け入れ先は米国であったが 1905 年の日露戦争以降排日運動が活発化。やがて 1924 年、排日移民法が制定され門戸が閉ざされてしまったのだ。この米国に代わる移民送出国としてブラジルに白羽の矢が立てられ、1924 年から 1934 年の 10 年間で 12 万 5 千人もの日本人移民がこの国に入国している。日本政府にとって、頼みの綱とも言えるこのブラジル移民であったが米国の排日運動の飛び火か、ナショナリズムの台頭か、ブラジル国でもきな臭い運動が起こり始めたのだ。

「ないがしろにすること」という意味なのでここでは、「吉報をないがしろにしてはいけない」と、記されているのだ。

確かに、ブラジル国が米国の様に排日論を振りかざし移民に門戸を閉じてしまうと、日本国は窮地に陥ることは自明の理であった。1920 年代の日本は、第一次大戦後の恐慌や震災恐慌、金融恐慌と立て続けの経済不況に見舞われ大変な苦境に陥っていたのだ。

そんな微妙な時に、アマゾン地方への日本人移民歓迎の暖かい手を差し伸べたジオニジオ・ベンテス新州知事は、リオ・デ・ジャネイロの医科大学を卒業した医師だった。排日を目的とするレイス法案を熱烈に支持している、医学界の大御所ミゲール・コウト博士やリオの医学士院メンバーとは、同じ医師仲間であった。

しかし、ジオニジオ・ベンテス新州知事はこれら医師達の起こした排日論支持運動に与せず「どこでも好きな土地を提供するので、日本人の方で広大なパラ州を開発して頂けないか」と、日本国大使館を訪れ田付大使に直接要請しているのだ。

同氏は、恐らくサンパウロでの日本人



▲移民導入のジオニジオパラ州知事

第一回移民の記念写真▶



移民とその開拓実績についての正しい知識があったものと思われる。実際に、そういう理解者は知識層には少なからず居たようである。

後に、アマゾナス州の開拓事業に肩入れする事になる辻小太郎が日本人移民の始まった 1929 年当時、ベレンから船でマナウスへ視察に出かけている。この船中で、アマゾナス州の次期州知事となる政治家ドルバル・ポルト氏と出会うが同氏は、「現州知事エフィゼニオ・デ・サーレス氏は日本移民誘導策を創案した人で、日本人に好感を有しているが、自分も同一政党でもし将来自分が州知事になれば、それ以上にもろ手を上げて日本人を歓迎する。自分は、サンパウロ州に於ける日本移民の状態を調査して、非常に良好なる移民だと信じている。イグアツペ植民地などは模範とすべきものである」と、日本人移民について好意的に述べているのだ。(注：イグアツペ植民地は、ブラジル初の日本人植民地)。

田付大使が、反日運動を抑える対策として考えていたのはまさにこの事であった。

日本人移民を、サンパウロ州だけに偏らせず各地方へ拡散させ出来るだけ日本人と接触する場を設けることで、多くのブラジル人の理解者を得る事であった。特に、ブラジル北部は日本人を見た事もない人達がほとんどで、リオなどからの偏った情報をもとに、排日法案を支持する政治家が多数いた様だ。

1925 年 1 月 3 日付「オ・エスタード・ド・パラ」紙の記事が有る。政治家ナバーロ・デ・アンドラーデが書いた排日記事を、アシス・シャテウブリアン記者が追記しているリオの新聞の転載である。

「この記事を読んだ読者は、以前から言われていたようにブラジルの知識人が日本人の入国を歓迎したのではないと気付くだろう。ブラジルは、何に関しても遅れているとナバーロは述べている。例えば、ブラジルは黒人奴隷制の廃止をした最後の国であるが、それはイギリスが迫ったからである。日本人移民に関しても同様といえる。ブラジルは、日本に関してよく調べないうちから日本人移民を

受け入れ始めた。例えば、イギリスやオランダの様に移民受け入れに関して理解している国民は、全体的に不都合な移民を強固に拒否したであろう。歴史上、前例のない事である。事前に彼の国の事を知っていれば、自由に出入りさせなかったであろう…」この他、「大阪商船の密輸船がサントスへ入港し乗組員が全員逮捕された…ブラジル人は、あの様な欠陥を持っていて特別な才能がない日本人を受け入れた…日本はブラジルに良い人材を送って居ない。当初の移民は、日本の一番遅れている島から送り出されている…」こんな悪意に満ちた記事が延々と続く。田付大使も、この手の報道にはさぞや立腹苦悩していた事だろう。

また、排日対策に戦々恐々としていた日本政府にとってパラ州やアマゾナス州からの日本人移民歓迎要請が、正に「天来の福音」であった事が理解された事だろう。

1926 年 5 月、入植地の土地選定のために日本から福原調査団がパラ州へ派遣された。この調査団の出迎えに、リオから田付大使一行もパラ州入りした。当時、アマゾン地方へのアクセスは海路でリオを出港した船は、大西洋沿岸を北上しベレン港まで 1 1 日間要した。福原調査団は、ニューヨークからの到着が予定より遅れた事から田付大使一行は、その機会にアマゾナス州へも足を伸ばしている。因みに、ニューヨークやイギリスからベレンまでの航海日数と、リオ=ベ

レン間の日数はほぼ同じであった。

福原調査団や田付大使のベレン到着以降、当地の新聞報道のトーンが変わり日本人移民導入計画に対し、好意的な記事が連日掲載されるようになった。ベレン市内には、柔道王コンデ・コマ(前田光世)が 1916 年から居住しており、市民の日本人に対する親近感の基盤はあったのかもしれない。

こうして、1929 年 9 月 16 日第一回のアマゾン移民 189 名が、ベレン港へ到着した訳だ。調査団が選定したアカラー(現トメアス)入植地は、後に悪性マラリアが猛威を振るい多数の犠牲者を出している。移民に犠牲は付き物とは言え、戦前のマラリア禍、戦後の無計画な移民送出。アマゾン移民は、先人の方々の尊い犠牲と血の滲むような努力とで、今日の繁栄を勝ち取っている事を 90 周年の節目に改めて認識するものである。

余談だが、手元に第一回移民がリオの移民収容所で撮った集合写真がある。筆者は長い間この写真を、単なるブラジル到着の記念写真とばかり思いこんでいた。

つい最近判明したが、この写真にはもっと深いわけがあった。アマゾン地方への日本人移民導入の先鞭をつけた恩人、パラ州の元州知事ジオニジオ・ベンテス上院議員(当時)が、同僚のデオドロ・デ・メンドンサ下院議員を伴い、第一回移民を表敬訪問した折の貴重な記念写真であった。

▲パラ州への移民募集ポスター



西部アマゾンにおける 日系移住90周年

西部アマゾンとは

西部アマゾン地域はブラジル北部のアマゾナス州、アクレ州、ロンドニア州そしてロライマ州で構成され、その総面積は日本の国土面積の約6倍を有する広大な地域である。そんな地域に戦前はアマゾナス州のマウエス郡に1929年、そしてパリンチンス郡へ1931年に日本人移住が実施された。

また、1953年3月に戦後初のブラジル日本移民としてアマゾナス州へ入植したのがジュート移民である。同年の9月にはアマゾナス州のベラピスタ移住地、1954年9月にはロンドニア州トレゼ・デ・セッテンプロ移住地、1955年9月にはパラ州ベルテハ移住地よりロライマ州のタイアーノ移住地及びミランジーニャ移住地へ転住、1958年11月にはアマゾナス州のマナウス市近郊のエフィジェニオ・デ・サーレス移住地、そして1959年6月にはアクレ州キナリー移住地への入植が実施された。

アマゾナス州 マウエス郡への入植

マウエス郡における日本人移住企画は1918年、崎山比佐衛氏による海外植民学校開設に端を発しており、その目的は農業技術者を養成することにあった。1929年に崎山氏は伊藤松乃助氏を代理人としてマウエスへ派遣し、植民学校の分校設立候補地を探させた。

一方、元鐘紡和歌山技師長の大石小作氏がアマゾン調査隊のメンバーとしてマウエスを訪問し不老長寿の妙薬として名高いグアラナのことを知り、また天候、土壌などの点で農業に適した土地だと判断し1928年9月、アマゾン興業株式会社を設立してマウエスで農業開発拠点設置の土地移譲契約が締結された。

1929年10月12日、9家族32名に17名の単身者を加えた計49名の最初の移住者グループが神戸港を出発した。サントス丸でリオデジャネイロに到着した一行はラプラタ丸へ乗り換え、12月19日にベレンに到着。そこからマナウスへの定期船へ乗り継ぎ、1930年1月2日にマウエスへ到着した。

1932年9月、海外植民学校の崎山校長は、家族をともなってマウエスへ移住、1938年には一定量のグアラナの収穫を得た。しかし、1941年マラリアに罹り享年67歳で波乱万丈の生涯を閉じた。

アマゾナス州 パリンチンス郡への入植

1927年、栗津金八氏、山西源三郎氏が100万ヘクタールの割譲を受け、その後上塚司氏へ移譲された。1930年、上塚氏は残りの土地割譲地域を選定するためのアマゾン第二回調査隊を率いて現状を把握した。移民たちの直面する困難を予想し、この野心的プロジェクト遂行のためのメンバーとして19歳から20歳の若者を選び、創立した国士館高等拓殖学校は過酷な環境で生き抜くために必要な教育、訓練を与えることを目的とした。最初のメンバーは日本からサントス丸で出港、1931年6月に拠点となるヴィラ・アマゾニアへ到着した。その

後、1937年まで243名の高等拓殖学校卒業生が入植した。その間、農業における様々な試みが施され、優先的に研究されたジュートに当初は好結果がみられなかったが、尾山良太氏がアマゾン気候風土に適合した苗（新品種）を発見したことによってジュート栽培が軌道に乗った。

これによりパリンチンス郡は著しく発展するが、第二次世界大戦勃発で日本人の財産は接収される。終戦後、上塚氏はヴィラ・アマゾニア再興のために奔走し、ジェットウリオ・ヴァルガス大統領に接見するが交渉は失敗に終わった。

ベラピスタ移住地への入植

1951年8月、上塚氏は10年の時を経て、アマゾンの地へ降り立った。それはジェットウリオ・ヴァルガス大統領に接見し、アマゾン河流域に移民を開放する要請のためであった。その内容はパラ州サンタレン市にジュートの紡績会社を設立することが目的で新会社設立はジュートの増産に大きく寄与すると予想、職工として500人の許可がおりた。こうして1952年、17家族54名からなる戦後第1次移民を乗せたサントス丸は神戸港を出発した。ジュート栽培に従事する予定だった移住者たちは当時高値を記録していたパラ州トメアスー移住地での胡椒栽培へ関心があつまり、ジュートへの関心は薄れていた。約1年後、連邦政府の主導により、ベラピスタ移住地が開設された。1953年9月より、この移住地には25家族からなる139名が入植、1962年までには、その数は125家族に達した。しかし97家族は他地域に移転していった。最終的には僅か30家族のみがこの地に定住し、ベラピスタ移住地の礎を築いた。



錦戸 健
(西部アマゾン日伯協会 会長)

▶エフィジェニオ・デ・サーレス移住地
第1次移民 (1958年)

ロンドニア州トレゼ・デ・セッ テンプロ移住地への入植

1954年9月13日にロンドニア州への移民が入植した。29家族、180名がゴム栽培を主目的とした移住地は入植記念日に因んでトレゼ・デ・セッテンプロと名づけられた。ゴム採取の他、ゴムの木、米、トウモロコシ、マンジョーカ、バナナ、野菜を栽培し、自ら消費するとともにポルトヴェリヨ市の市場にも供給した。その後は胡椒、コーヒー、カカオ、グアラナの栽培が始められ、また養鶏、養豚に牛などの飼育も始めた。この移住プロセスには1933年にアマゾナス州パリンチンス郡のヴィラ・アマゾニアへ入植した高等拓殖学校卒業生の上森六園氏が多大に貢献した。

ロライマ州タイアーノ及びミ ランジーニャ移住地への入植

ロライマ州への移住は、パラ州ベルテハ地区への移住者13家族がポアヴィスタ市へ転住したことに始まる。2家族が州都ポアヴィスタ市近郊のミランジーニャ移住地へ定着、11家族は州都から90キロメートル離れたタイアーノ移住地へ入植した。全ての移民に共通しているように、この地域の移住者も例外なく幾多もの試練に直面した。

その後、タイアーノ移住地には1961年に9家族が佐賀県から入植した。

アマゾナス州エフィジェニオ・ デ・サーレス移住地への入植



▲エフィジェニオ・デ・サーレス
組合のトラック (1963年)

▶エフィジェニオ・デ・サーレス
移住地野球チーム (1963年)



アマゾナス州への農業不適地への最後の計画移民とされる移住地であるベラピスタ移住地への入植が予定されていたが、地理的な困難を見かねた高村正壽氏（海協連マナウス事務所長）は州知事との接見の際、マナウス-イタコアチアラ街道沿いに、マナウスを市場とする農業移住地を設立するアイデアが生じ、1958年から1960年までの期間に180家族を移住させる契約締結が具体化した。1958年には第1次移民17家族、1959年には第2次移民6家族、1960年には第3次移民15家族が、マナウス-イタコアチアラ街道の37~44キロメートル地点に入植し、最終的に1961年には第4次移民16家族が52キロメートル地点に入植した。

アクレ州キナリー移住地への入植

アクレ州の最初の日本人移民は、神戸港から船で111日間をかけ、まずベレンに到着、そこから船を乗り継いで1959年6月に第1次移民6家族がリオ・ブランコ市に到着した。同年8月には第2次移民7家族が入植する。これらの移住者はキナリー移住地で野菜栽培、また現在でも続くゴム採集に従事した。

1970年代には更に5家族が入植、またアクレ州とロンドニア州を結ぶ国道364号線開通に伴い、サンパウロ州やパラナ州などからの国内移民が増えた。

まとめ

西部アマゾン日本人移住の中心的地域でもあるアマゾナス州には戦

前の1929年、グアラナ栽培を目的とするマウエス郡への移住が発端となり、1931年にはパリンチンス郡へ高等拓殖学校卒業生が移住した。当時はゴム景気の衰退でアマゾナス州の産業は皆無状態であっただけに、ブラジルの主な生産物であったコーヒーの梱包に不可欠なジュートの栽培に成功していることや、その後の移住者の勤勉且つ真摯な振る舞いから当時より現在においても当地のブラジル人は「ジャポネース・エ・ガランチード」、つまり直訳では「日本人は保証できる」といった全幅の信頼を日系人によせている。

また農業の発展にも日本人移住者が貢献しており、そしてマナウスに自由貿易港(ZFMマナウス・フリーゾーン)が設立され、商業及び工業分野において日系商社及び日本の進出企業が活躍し経済発展に貢献している。

2011年にアマゾナス州議会にて開催された高等拓殖学校卒業生移住80周年記念式典で、当時の州議会議長が戦時中アマゾナス州在住の日本人に与えた迫害に対して謝罪した折の光景は今でも鮮明に記憶に蘇る。また、当日は97歳で式典に参列し、表彰された高等拓殖学校卒業生の東海林善乃進氏は、その壇上で「ただ日本人であっただけでブラジル人の兵隊からムチで46回も打たれたが、謝罪してもらったことで全てを水に流す」と語られたことも緊急に通訳を任された私には一生忘れられない歴史的瞬間の貴重な思い出でもある。

今年には日本人アマゾン移住90周年記念の節目の年である。この意義ある年において更なる歴史的瞬間の再現を期待しているのは決して私だけではないと思っている。



アマゾン日本人移住90周年記念式典 その現地日程とロゴマーク

「ブラジル特報」編集部

1929年9月16日

アカラー（現トメアスー）入植地に向かう、第一回のアマゾン移民189名がベレン港に到着したのが、1929年9月16日であった。従って、今年2019年は、アマゾン日本人移住90周年の年である。

この90年という時間が経過したが、アマゾン地域における日系人の活躍範囲は広がり、初期の入植目的であった農業部門はもちろんだが、現在では、経済・商業部門、医療部門、教育部門でも政界でも活躍する日系人が増えている。なかでもトメアスーで苦闘の末試行・開発されたアグロフォーレストリー（森林農法）は、大規模モノカルチャー農業の失敗、アマゾン環境破壊という苦い経験を踏まえた、森林保護と農業経済活動の共存・両立を具体的に模索する試行的農法であり、この農法は西部アマゾン地域にも広がりつつあり、さらにはサンパウロ州やリオデジャネイロ州のマタ・アトランチカ（大西洋森林帯）においても様々なアグロフォーレストリー農法が行われるようになってきている。熱帯で苦闘を重ねて来た日系農家だからこそ開発できた新農法であり、日系の枠を超えてブラジル農業経済にも環境保全活動にも貢献している。

この90周年の機会に、こうした日系人によるブラジル社会への様々な分野での貢献は改めて冷静に再評価されるべきであろう。

北伯の日系人口

北伯（パラ州、アマゾナス州、ロライマ州、 Rondônia州、アマパ州、アクレ州、マラニョン州）における日系人の人口は約5万人と推定されており、これは全ブラジル（推定190万人）の約3%に相当する。

90周年記念ロゴマーク

この90周年を記念し、昨年12月に選定されたロゴマークは右記の通り。



2019年9月の式典日程

「アマゾン日本人移住90周年記念祭」は、トメアスー、ベレン、マナウスの3か所にて開催される。

①トメアスー

9月13日(金) 10時より

会場：「トメアスー日本人会館」

主催者：「トメアスー開拓90周年実行委員会」
(会長は柴田シルヴィオ文化協会会長)

②ベレン

9月14日(土) 17時より

会場：「平和劇場」

主催者：汎アマゾン日伯協会並びにパラ州政府の共催

③マナウス

9月15日(日) 15時より

会場：「アマゾナス劇場」

主催者：「日本人アマゾン移住90周年祭典委員会」
(会長は錦戸健・西部アマゾン日伯協会会長)

尚、ベレンではこの祭典と並行して1週間に亘って「日本週間・アマゾン祭」が開催される。このイベントには米国ニューヨークから和太鼓グループが参加するほか、日本からはアマチュア歌手 Zenkyu が、自ら作詞作曲した「この地に舞い降りたのは」を熱唱することになっている。このロック・バラードは、知人の垣添恵子さんの半生（1955年、13歳の時家族と共にベルテラ入植地に移住、現在はサンパウロ在住）を歌詞に組み込んだものであり、まさにアマゾン移住90周年を謳う内容となっている。ちなみに、垣添さんには弊誌2018年3月号（「ウーマン・アイ」欄）に「ブラジル在住63年、アマゾンからサンパウロへ」を寄稿していただいた。（今一つ、「内輪話」をすれば、この歌手 Zenkyu は、弊協会理事も務める小川善久さんである。）

文協会長としての抱負



石川レナト
(ブラジル日本文化福祉協会会長)

この度、昨年7月の眞子内親王殿下のご臨席を賜り挙行された「ブラジル日本移民110周年記念式典」他様々な記念行事の大役を担った呉屋春美前会長より、ブラジル日本文化福祉協会（文協）の会長職を引き継ぐことになった。

私は日本人の両親を持つ典型的な日系ブラジル人二世で、日本語教師の父と、家の畑で農作物を栽培し家計を助けていた母から人生の土台となる「何事も一生懸命やる」や「人様を尊敬する」などの教養を学んだ。そして経営者になるという夢を実現するため、サンパウロのマッケンジー大学やジェットウリオ・バルガス大学院で経済学や経営学を学んだ後、ニューヨーク大学でファイナンスマネジメント学を修了して以来ずっと経営畑を歩んできた。

その後、スウェーデンのブラジル・エリクソン社や日本のブラジル・NEC社の社長等のポストに就き、延べ35年もの長い間、ブラジルの電話通信事業に携わったことは私にとって何事にも代えがたい経験だった。当時は、アナログ電話からデジタルに代わる、通信の世界でも大きな転換期で、ちょうどブラジルの軍事政権の時代でもあったため近代的なインフラ整備は国家の最優先課題でもあった。

2012年にサンタクルス病院理事長（『ブラジル特報』本年3月号掲載）に就任し、2019年までの7年間で、日系社会の手を借りながら、企業人時代の人脈やデジタルネットワークの知見を活用することで経営黒字化を達成することができた。今回の文協会長就任は、同病院経営改善の実績が評価され、実現したものであるが、文協でもこれまでに得た経験や人脈をフル活用して日系社会の活性化に努めたいと思っている。

●全伯および海外の日系社会との関係強化

今年7月に行われたブラジル各州の日系団体を招いて開いた会合では、文協が全伯の日系社会の活動を効率的にし、また各団体の風通しをよくしながら持続可能な団体にするという「ブラジル日本文化福祉協会運営の基本方針2019～2021」を示した。これまで文協が行ってきた伝統的な活動を継続しつつ、現在のブラジルと世界の技術的、科学的、社会的変革と進化や日系社会を取り巻く環境を見ながら各団体にとってより効率的・効果的なフォーマット作りを行っていかねばならない。また、全伯の日系社会団体や従来より関係ある日本の関連団体、日本ブラジル中央協会や海外日系人協会のみならず、

ニューヨークのジャパン・ソサエティーなどアメリカ大陸に存在する同様の使命を持った海外の組織とも連携し、お互いの経験を共有しながらブラジル全体に日本・日系社会の文化が普及するよう邁進したい。

●文協の持つ文化資源の有効活用

今後の課題として、サンパウロ市イピラプエラ公園内の「日本館」(1954年サンパウロ市制400年祭記念事業)の改修を終えたのでサンパウロ・ジャパンハウスとの連携活動や、サンパウロ州サンロケ市にある国士館大学スポーツセンターの再開の一環としての「原沢和夫ハビリオン」の完成（移民110周年事業の記念遺産）が挙げられる。また、文協ビル内にあるブラジル日本移民史料館を有効に活用したり、「文協美術館」の促進や、「文協文化ホール」の完成も急がなければならない。当地には日本ルーツに目覚める若い日系人や日系社会に触れたことで日本文化を愛するようになった非日系人が数多く存在する。上記の場所で、ブラジルで活躍する若者と一緒になってブラジルの日系社会が大切に守ってきた文化遺産を適切に保存しながら、研究を深め、そして新しい活動やイベントを実施することで次の世代に日本文化を継承していきたい。さらに、日系団体に所属していない日系・非日系の人達に日本文化に触れ合う機会を多く創出し、新たな親日派・知日派を育てていければと考えている。

●日伯両政府や日系企業との連携強化

1908年、日本人が笠戸丸に乗って初めてブラジルへ移住して以来、日本人・日系ブラジル人はブラジルの発展に多大な貢献をしてきた。そうした中で培った人脈や地位を駆使し、日伯両国間の制度設計のための新たなルート作りやネットワークの構築・活性化にも力を入れていきたい。また、ブラジル日本商工会議所等と連携しつつ、日系社会の持つコネクションによって日本企業がブラジルへ進出する際の助けとなるような活動、つまり日系企業と日系社会のウィンウィンの関係性を確立していければと考えている。

以上が「文協会長としての抱負」であるが、今後、企業人時代に学んだ（アナログ、デジタル両方の）ネットワーク構築術を使い、人と人とのつながり一絆一を創出して日系社会全体を活性化していければと考えている。

ブラジル日系社会の大衆音楽演奏者のひとりごと



川原崎隆一郎
(月刊「ビンドラーマ」代表取締役)

私は零細出版会社の経営が本職だが、その傍ら音楽活動を行っている。今や「傍ら」とはいえないほど完全にハマってしまっていて、どちらが本職かわからないほどだ。

サンパウロの日系社会ではカラオケがとても盛んだ。毎週日曜日と祝祭日にカラオケ大会が行われていて、大会がないのは母の日とクリスマスくらいのも

だ。どんな大会でも最低300人規模で、大きい大会は700人以上集まるものもある。歌手は聴衆の前にステージで歌い、審査員が細分化されたカテゴリーごとに参加者全員採点し、順位をつける。

カラオケ大会について書くだけでも長大膨大なレポートになると思うが、それは別の機会に譲るとして、こんな盛んなカラオケ大会の合間に年に一度、バンドの生演奏をバック

クに歌唱力を競う大会がある。私の音楽活動とはこれに関わるものである。

大会の名前は「Concurso Brasileiro da Música Popular Japonesa (全ブラジル日本歌謡コンクール)」、略称「全伯 (Zen-paku)」である。今年行われたのが第67回だから、戦後間もなく始まり今日まで脈々と続く伝統ある大会だ。

今回の参加者 (歌手) は子どもから老人まで総勢160名、これを4つのバンドで、各バンドが40曲担当して伴奏する。数少ない子どもが童謡や文部省唱歌を歌い、また数名の若者がJ-POPを歌うが、それ以外老若男女みな「演歌」を歌う。今や昭和のポップな歌謡曲まで「ニュー演歌」と呼ばれているそうだから、すべて演歌と言って差し支えないだろう。

これほどまでに「演歌」が歌われるのはなぜか。サンパウロでカラオケを教える広瀬秀雄氏 (小説家・醍醐麻沙夫氏の弟) によれば、それは日系人のアイデンティティに関わる。日本語ではニュアンスが伝わりにくいかもしいが、彼らはブラジルで生まれ育っていても「japonês (日本人)」と呼ばれる。普通のブラジル人ではないのだ (もちろんブラジル人としてのアイデンティティも持っている)。「japonêsらしい音楽」を追求すると自然に「演歌」にたど

りつくようだ。実際に日系三世の若い歌手と話すと、「昔からおじいちゃん、おばあちゃんが演歌を聞いたり歌ったりしている環境で育って好きになった」という。そして、J-POPは英米の音楽のまねごとにしが見えないのか、「japonêsらしい音楽」ではないようである。

さて、私のバンドは415 Unsupported Media Type という名前で (YouTube ページに動画がある)、できてからまだ5、6年しか経っていないが、他の3つのバンド、すなわち、The Friends、Cosmos、NAK は最低20年以上の歴史がある。

「40曲演奏」と言葉でいってしまえば簡単だが、実際にはなかなか大変なことだ。だが聞くところによると、一日に100曲以上演奏なんていうのが昔ブラジルの日系社会ではあったらしい。ちなみに、終戦の前に行われる「日本人心の歌」、年末に行われる「紅白歌合戦」、いずれも日系社会の主要な音楽イベントだが、こういったイベントでは50曲以上をひとつのバンドで演奏している。私も何度か演奏を手伝ったことがある。

私のバンドは今回は14名 (ドラム、パーカッション、ベース、ギター3、キーボード3、バイオリン1、管楽器4) だった。メンバーは日程が合えば参加するというスタイルなので、大会ごとに人数が変動する。素人同然のメンバーからプロまで混在しているので、なかなか完璧な演奏は難しいが、歌う人が歌いやすいよう最善を尽くすという目的はある程度果たせていると思う。日系カラオケ界 (バンドなのでカラオケではないのだが) での評判も上々だ。

私は演奏はキーボードかギターを担当しているが、演奏以上に重要な仕事が楽譜の作成で、メンバー全員の楽譜を作るのに時間がかかる。今の時代さすがに手書きではなく、良いソフトがあるので書くのは楽になっている。たまに、音楽を聞き取って楽譜にする機械か何かがあると思っている人がいてびっくりするが、そんなものはないのでコツコツと耳コピしている。

大会前の練習は週末を利用して、県人会など安価で貸してくれる日系の施設で7、8回行う。こういうときにブラジルで歴史を築いてきた日系社会のありがたさを痛感する。練習は午前中に開始して夕方までかかるので、昼食は歌手の方々の持ち寄りだ。これもとてもありがたい。年齢70以上の歌手が多く、こうした「先カラオケ時代」のベテラン歌手にはカラオケよりもバンドのほうが面白いという人が何人もいて大変興味深い (バンドで歌うほうが難しい)。中には3歳でブラジルに渡り85年という方もいる。

JTグループ ブラジルでの取り組み



岡田有祐
(JT 渉外企画室 国際担当部長)

JTグループの歴史

日本たばこ産業株式会社 (以下 JT) の歴史は1898年、政府が国産葉たばこの販売を独占的に管理するために設置した専売局に遡る。1949年には専売局は日本専売公社へ改組され、たばこ専売制度の実施主体として、たばこの安定的供給と財政収入の確保に貢献する等の役割を果たした。その後、成人人口の伸び率鈍化・健康への意識の高まり等を受け、国内市場の縮小をいち早く展望したことから、国内単一・単品市場からの脱却を企図し、国際化・多角化の道を歩むべく民営化へと踏み切り、1985年4月には日本専売公社の事業と資産がそのまま移管される形で JT が設立された。1990年までの間に医薬・食品事業部も新たに設置し、今に続く事業基盤を構築した。

たばこ事業については積極的な海外展開を行っており、1999年にはRJR ナビスコ社の米国たばこ事業を買収し、世界的な2大ブランド「ウィンストン」「キャメル」を仲間に迎え、世界第3位のたばこメーカーへの躍進を果たした。2007年にはヨーロッパで広くたばこ事業を行っていたギャラハー社の全株式を取得し、世界第3位のグローバルたばこメーカーとしての地位を強化した。現在 JT グループのたばこ製品は130か国で販売されており、70か国に配置された事業所において100か国超の国籍の社員が働いている。

また従来のたばこ製品に加え、ブルームテックに代表される加熱式たばこや電子たばこ等、たばこ葉を燃焼させない新しいスタイルのたばこ製品は、喫煙に伴う健康リスクを低減させる可能性があり、より多くのお客様にご満足いただけるものとする。今後も健康リスクを低減させる可能性のある製品を開発しお客様に提供していくとともに、科学的評価についての調査研究を進めていく。

ブラジル市場への進出

JT の海外子会社である JT International (以下 JTI) としてのブラジルたばこ市場への参入は2001年まで遡り、他社への製造・販売委託契約を通じた展開を行っていたものの、2011年6月末に契約終了したことに伴い、同国での製品流通は途絶えていた。しかしながら、JT グループにとって

ブラジルは、今後の経済発展が見込まれる有望な市場であることから、2014年2月に JTI ブラジルとして同市場への再

参入を表明し、サンパウロやリオデジャネイロ等で「ウィンストン」「キャメル」を販売開始した。また、2015年には流通体制の強化に向け、現地流通会社「Fluxo」を買収、現在に至るまで着実に販売数量を伸ばしている。

葉たばこの安定的な調達

葉たばこ生産国としての顔も持つブラジルは、原料調達先としても JT グループにとって重要な国である。ブラジル産のたばこ葉は、深い味わいと豊かな香りの製品を作るために欠かせない要素であり、最適なコストで高品質な葉たばこを持続的に調達することは事業運営上とても重要であることから、2009年には現地葉たばこサプライヤー「Kannenberg社」を買収する等、葉たばこの安定調達へ注力している。安定調達に向けては JT グループのみならず、葉たばこ農家が長期的な収益確保を実現していくことが必要不可欠であり、それに向け「適正な価格設定」「生産コストの低減」「先進的な耕作法の展開」という3つの重点分野を置いている。

また、その他にも葉たばこ耕作地域の社会・労働環境を改善することで、持続可能で健全なコミュニティづくりを支援している。具体的には、「児童労働の防止」「労働者の権利尊重」「適切な労働安全衛生の維持」といった課題について、農家が守るべき基準を定義し、葉たばこ農家の方々に遵守をお願いしている。加えて、児童労働については国際労働機関 (ILO) や NGO とともに ARISE (Achieving Reduction of Child Labor in Support of Education) プログラムを立ち上げ、啓発資料の配付等により教育の重要性を葉たばこ耕作コミュニティに訴えとともに、ラジオやソーシャルメディアを通じて多くの人にメッセージを届ける啓発活動を継続している。ブラジルでは本取り組みによって、2018年には約2,000人の子供たちが学校に通えるようになり、23,000人以上のコミュニティに対して、児童労働についての啓発を行った。

今後の展望

2018年にはラテンアメリカでは初となるシガレット製造工場をサンタ・クルス・ド・スール市に新たに設立し、原料の調達・加工から製造、流通までのサプライチェーンをブラジル国内に構築することができた。これにより、製品の市場投入までのリードタイムが短縮され、ブラジル市場のお客様動向・競合動向等に柔軟に対応できるようになったことに加え、将来成長が期待されるラテンアメリカ地域における製造拠点となることも展望されている。現在 JTI ブラジルには1,000名以上の直接雇用社員がおり、葉たばこ収穫の最盛期には季節労働者を加えた1,500名以上のメンバーで、ブラジルにおけるさらなる事業拡大を目指している。



サンタ・クルス・ド・スール市にあるラテンアメリカ初のシガレット製造工場

債権回収のいろは

ブラジルの景気はここ数年非常に落ち込んでおり、業績悪化に苦しむ企業は多い。その結果、債務の支払いが滞り、債権者は債権の回収に頭を悩ますことになる。そこで、本稿では、債権回収の方法や手続について解説する。なお、本稿執筆に際しては、友人である津野マルセーロ裁判官から多くの助言を受けた。

1. 話し合いによる解決

債権回収のためいきなり訴訟提起することも考えられるが、訴訟は時間も手間もかかる。債務者の不払いが一時的な資金の問題であれば、分割払い等を提案することで債務者が支払いに応じてくれる可能性はある。ブラジルでは、民事訴訟の敗訴者は、相手方弁護士費用（訴額の10%～20%で裁判所が決定する額）を支払う必要があるため、債権の有無に争う余地がないような事案であれば、訴訟提起の可能性を示唆することで、債務者が話し合いに応じる可能性はある。

2. 訴訟提起

債務者がそれでも支払わない場合は、訴訟提起するしかない。通常の商事債権の場合、契約書に特段の規定がなければ、原則として被告の住所地の地方裁判所に訴訟提起することになる。ブラジル国外に所在する者が原告となる場合、ブラジル国内に十分な不動産を保有していない場合、裁判所が決定する担保を提供しなければならない。訴訟提起や控訴には裁判所の規則に従い裁判費用を支払う必要があるが、かかる裁判費用は最終的には敗訴者が負担する。

なお、債権者が、裁判外の執行名義（titulo executivo extrajudicial）を有している場合、訴訟を経ずに強制執行が可能である。抵当権、小切手、公正証書などがこれに該当する。

3. 仮差押え

日本と同様に債務者の資産を訴訟提起前に仮差押えすることも可能である。仮差押えのためには、債権者が本訴で勝訴する可能性が高いこと及び仮差押えをしなければ債権者が被る損害が大きいことを立証する必要がある。仮差押えに際しては、裁判所が決定する額の担保を提供する必要がある。

4. 判決の確定

判決が確定したにもかかわらず債務者が支払わない場合、債権者は、裁判所に対して、債務者に対して支払命令を出すよう要請できる。債務者が支払命令から15日以内に支払わない場合、罰則として10%が加算される。

5. 強制執行

それでも債務者が支払わない場合、債務者の資産に対して強制執行することになる。強制執行は第1審の判決後に申立て可能であるが、控訴された場合は執行手続は停止される。



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士
現在ブラジルで勤務)



津野マルセーロ
(サンパウロ州高等裁判所
グアリュリョス支部
第7民事室裁判官)

一方、第2審で勝訴した場合には、仮に被告が最高裁判所へ上告しても執行手続は停止されない。強制執行の対象は、銀行預金、動産、不動産、第三者への売掛金などであるが、対象となる資産の有無の調査は原則として債権者が行う必要がある。もっとも、一定の場合、裁判所に申し立てることにより資産の有無を確認できる。たとえば、債務者が銀行預金を保有しているか否かについては、裁判所が中央銀行のシステムを利用して確認できるので、日本のように銀行やその支店を特定する必要はない。自動車や不動産の有無についても、ブラジル全土ではないが裁判所が公的機関のシステムを通じて確認可能である。また、在庫などの動産の有無も、裁判所に、被告の所在地（倉庫など）の現場確認の申立てを行うことができる。この申立てが認められれば、裁判所により選任された者が当該所在地に行って現場を確認する。現場確認の結果、動産が見つければ差押え可能となる。差し押さえた動産や不動産は、裁判所の手続のもと競売にかけられるが、債権者がその所有権を取得して差額を現金で返金する方法も取り得る。そのほか、債務者の第三者に対する債権（売掛金など）も差押えが可能であり、売掛金の有無の調査（帳簿の確認など）を申請することも可能である。さらに、債務者が第三者に金銭支払請求訴訟を提起している場合、たとえ当該訴訟が係属中であっても、当該訴訟の対象となっている債権の差押えも可能である。

なお、民事訴訟法において、差押えを行う際の優先順位が規定されている。たとえば、第三者に対する売掛金の差押えの順番は、銀行預金、公債の債券、有価証券、車両、不動産などの差押えよりも後に行われるべきと規定されている。実務上、必ずしもこの順番が絶対ではないが、たとえば、いきなり売掛金の差押えを申し立てた場合は却下される可能性がある。

一方、強制執行ができない資産も規定されている。たとえば、債務者の自宅にある家具などである。

6. 法人格否認の法理

債務者に全く資産がない場合、債務者以外の者の資産から債権を回収する方法を検討することになる。その一つが法人格否認の法理（desconsideração da personalidade jurídica）である。法人格否認の法理が認められるためには、日本と同様に、法人格の形骸化や濫用の事実を立証する必要がある。たとえば、債務の支払いを免れるために別法人に事業を譲渡して負債のみ元の法人に残すような場合が濫用のよくある例である。

Lei de Informatica (情報産業法)の改正



ウィリアム・カレガリ
(KPMGサンパウロ
事務所
タックス・パートナー)



ヒカルド・ホア
(KPMGサンパウロ
事務所
タックス・ダイレクター)



吉田幸司
(KPMGサンパウロ
事務所
パートナー)

はじめに

1991年に連邦政府により制定された Lei de Informatica（情報産業法）は、研究開発（R&D）及び技術イノベーションに投資するテクノロジー及びコミュニケーション分野の企業へ税務特典を付与しており、約30年に亘り施行されている。

当該分野の技術進歩を更に進歩させるべく当該法律の近代化を進める議論が進められており、近年、以下のような改正がなされた。

- Lei de Informatica を適用する会社はそのプロジェクト及びプロジェクトに関する支出について独立した監査人から監査を受ける必要がある。
- 研究開発及びイノベーションに対する支出だけでなく、一定の基準を満たした企業（スタートアップ企業）への間接的な投資についても当該税務特典の対象となっている。

一方で、2018年12月には、世界貿易機関（WTO）から当該法律の違法性が指摘されており、今後WTOの要求に準拠させていく必要がある。今回は近年改正され今後まだ改正が予定されている当該法律について説明したい。

Lei de Informatica の概要

当該法律は、工業製品税（IPI）の税率について対象となるアイテムに対し通常15%のところを最大で80%減額（IPI税率を3%へ）といった税務特典を付与している。

当該税務特典の恩恵を受けている製造業者は、一定レベルの国内生産や純売上高の4%相当額を研究開発、イノベーションプログラムへ投資するといった基準を満たす必要がある。

連邦政府はテクノロジー分野へのイノベーション投資を奨励する1つの方法として当該法律を施行している。現在、約600社が Lei de Informatica の税務特典の恩恵を受けていると言われており、対象となる製品は、コンピューター（ラップトップ、すべてのコンポーネント及び周辺機器を含む）、スマートフォン、タブレット、電子機器、モニター、デジタル技術デバイスといったものとなる。

監査義務

2017年度以降、科学・技術・革新・通信省（MCTIC）は税務特典に関するガバナンスを強化するための対策をとっている。MCTIC 内の協議、また、ブラジル独立監査人協会（Ibracon）とともに統制及び監督の強化方法を確立しており、MCTIC は、2018年度最終四半期中に公認独立監査人による手続を規制する条例を公表しており、この条例には、ブラジル証券取引委員会（CVM）により認められた独立監査法人による年次監査といった要求も含まれている。

税務特典の対象範囲の拡大

Lei de Informatica のその他の改正の1つとして、テクノロジーをベースとする企業（スタートアップ企業）へ出資するブラジル証券取引委員会から承認された投資ファンドへの出資が Lei de

Informatica の税務特典の対象となったことである。ただし、Lei de Informatica の税務特典を享受するためには、その投資ファンドについては以下のような要件を満たす必要がある。

- ブラジル証券取引委員会に登録されている
- 投資期間は最長6年であり、6年経過後の新たな投資は禁止されている
- テクノロジーをベースとする企業への投資のみ
- 投資ファンドの株式を流通市場で取引することはできない
- 税務特典を享受する会社は投資ファンドの株式を35%以上保有できない

また、対象となるスタートアップ企業についても、以下のような要件が定められている。

- ビジネスの不可欠な要素としての技術を有し、イノベティブな製品、サービス等を開発すること
- 年間売上高が16百万リアルまで
- その投資を受けている期間において、配当は利益の最大25%まで
- ブラジル国内外のファンドから投資を受けている期間において、財務諸表に計上されている資産のうち90%以上がブラジル国内に有すること

スタートアップ企業へ投資する投資ファンドへの出資がその要件（投資ファンド及びスタートアップ企業の両方の要件）を満たせば、当該税務特典を受ける可能性があるが、そのハードルは一見高そうとも見える。

WTO 違反への対応

WTO の要求に対応すべく MCTIC は、基礎製造工程基準（PPB）を更新し、WTO 違反となることのないように効率的に国内産業化を証明する採点システムの採用を進めている。

ただし、WTO の要求に準拠するために、当該法律の変更がまだなお2019年度末までに予定されており、例えば、自動車産業と同じように IPI の税額控除といった税務特典に変わる方法が考えられている。

おわりに

現在ブラジル政府は、税務特典を受けている企業のそのインセンティブについての監視を強化しており、対象となる企業については、その情報の適正性を証明すべく独立監査人の監査を採用するなどのコンプライアンスの強化が必要となっている。

また、Lei de Informatica は2019年度末までに変更される可能性は非常に高い。しかし、ブラジルにおいてイノベーションに対する期待は高く、政府の後押しを受けて今後、ますます海外からの投資も増えていく可能性も否定はできない。

ブラジルには多くのスタートアップ企業が存在しており、例えばサムソンはブラジルでスタートアップ企業に多く投資している。ブラジル政府が海外からの投資を呼び込もうとしており、Lei de Informatica の改正が今後後押しする可能性も否定できない。当該法律の改正には留意をしていく必要があるといえる。

ブラジルに渡って40年 (前編)



飯島秀昭
(美容師)

埼玉の片田舎で生まれ、20歳で上京、そして最後の5年間は東京・原宿で勤務していた。それが何故、ブラジルに居るのか。

団塊の世代に生まれた者は闘う事が生きる術だった。同じ世代の美容師は皆、海外でもロンドン・パリ・ロス・ニューヨークを目指していた。まあ美容師でブラジルを目指したのは唯一人と言っても過言ではない。そんな人間がブラジルに渡って40年も経ってしまった。

床屋の次男として生まれ、幼いころは父親と遊んだ思い出もごく僅か、そんな環境で育ち、大人になったら子供と遊んであげられるような父親にと想っていた。堅気の職業を選ぶ予定が高校卒業する頃には堅気な職業は自分に合わないと思い、逃げ込んだのが美容師と言う世界だった。選んだ後しばらくは後悔していたが、選んだのだから天職と思えと自分に言い聞かせて邁進するようになった。

東京に出て運良く原宿の有名サロンに就職できた。それが人生を大きく変えるキッカケとなる。結婚して一児の父親となり、美容師として最絶頂の時期を迎えた。サロンワーク・講習活動など1年で10日間くらいの休暇以外はすべて仕事、仕事であった。あの当時はカリスマなどと言う言葉は無かったけれど、今風に言えばカリスマ美容師だった。月間600人以上の顧客をアテンドしていたが、最高で月間760人の記録も持ち、講習活動でも日本全国を駆け回っていた。

そんな有頂天になっていた時、たまたまの休日に、久しぶりに親子対面することになった。当時息子は3歳だったが、その息子が私に向かって「おじちゃん」と。この一言を耳にした瞬間、全身の血が引く想いがした、俺は何をやっているんだ、と。父親としては幼い頃に想った父親像の真逆をやっていた。この体験もあって東京の生活にピリオドを打つ決心をした。女房の実家が長野だったので、自然の中で美容師と父親をやろうと想っていた。たまたま地方講習の間に矢沢永吉のコンサートを見る機会に恵まれた。あの永ちゃん、だ。ちょうど彼の誕生日は昭和24年9月14日と、私と1年と1日の違い。ステージの彼は全力疾走していた。それを見た瞬間に青春時代の夢、海外での生活が脳裏をよぎった。これで良いのか、田舎に帰って後悔は無いのか、一人で自問自答を繰り返した。子供が学校に入るまで3、4年ある、ヨシ、出よう、そう決断を下した。そして友人を頼ってブラジルにやってくることになっ

た。日本人にとってブラジルは本当に遠く想像出来ない国だろう。私も何の情報も無く移民として、4歳と1歳の子供と妻の4人家族でブラジルに渡った。ブラジルを選んだ理由は最初から永住権が取れるからだったが、美容師としてはちょっと異例な事であった。米国や英国で美容師をやるには当時は永住権の問題は大きなネックであり、家族持ちは永住権が無くては家族の安全も生活も保障されなかった。最初から永住権が取れるブラジルは私にとっては安全策であった。まあ海外で生活する事は想像以上に大変であるとは覚悟の上だったが、その想像をはるかに越える現実と直面することになる。

でも、そんな厳しい現実と対面することになると、今までどこかに潜んでいた闘争心が顔を出してきた。3年間の下住み生活にピリオドを打って1982年32歳の誕生日にSOHO(蒼鳳)というサロンの1号店をオープンした。1980年代のブラジルは本当に経済も荒波で日本の常識では考えられないようなことばかり起きた時代だった。そうした時期に開店した、このサロンのテーマは、「ブラジル社会に日本と自分を問う、日本で学んだ技術そしてフィロソフィーを伝える。ブラジルでは考えられない人材養成と時間厳守」といったものであった。時世には逆らう方向であり、当初は友人から猛反対を受けた。人材養成は敵を作るようなものであり、そして時間厳守なんてこのブラジルでは通用しない、と。だが、これがSOHOの基礎を築いたのだ。

借金で始めた第1号店だったが、おかげさまで創業から25年経った頃にはサロンも30店舗、従業員1100人、月間6万人をアテンドする会社になった。苦勞らしい苦勞も無く25年間過ごした会社も25周年を機に子供達に渡し、円満退社し今に至る。

ブラジルで学んだ事は沢山あるが、一番の学び事が人生を楽しむ事だった。3時40分に起床して街路を4時から1時間以上掃除しているが、これもまた楽しい。まあブラジルに感謝を込めて恩返し、朝から充実感があって楽しく嬉しい。ブラジルは本当に素晴らしい国だ。よく人は言う、「心の貧しさがあの大国を作り、ブラジル人の心の豊かさが今の貧困を作った」と。でも、その豊かさが私のような移民を快く受け入れてくれ、そして日本人移民が作った信用が私を育ててくれたと想う。ブラジルの地にそしてブラジル人に最後に日本人先人の方々のご苦勞に感謝する。



一風変わった日系四世ブラジル人

鎌田ローザ
(在ベレン領事事務所職員)

「黒胡椒の価格は黒ダイヤに相当」と言われるくらい胡椒の値段が最高値に達した黄金の時代が一時期あったブラジルの北部、パラ州トマス市(ベレン市より約200キロ地点)で生まれ育った。その頃、小中学校は地元にて、高等学校は同州都ベレン市にて進学が一般的であり、両親にもその様に勧められ、学生寮で生活しながら高校卒業後スムーズにパラ連邦大学まで進んだ。その途中、汎アマゾン日伯協会という日本文化団体にて勤務し始め、より一層日本・日本語の学習に励み、学業が若干疎かになったが、数年後無事に建築設計学科を卒業し、両親も卒業式に参加した。同大学学科卒業写真が掲載されている地元新聞の切り抜きを大切に保管していたことが、父の遺品の中に見つかり、今でも時折思い出すと目頭が熱くなる。

故父譲二はパラ州モンテアレグレ市(ベレン市より直線約620キロ地点)にて誕生した日系三世ブラジル人。父の母・光子は第一回移民船笠戸丸に乗船し1908年に渡伯した故山田勘一・ヲリエ夫妻の次女で、日本力行会の一員としてブラジル移住した鎌田譲と結婚。現在、笠戸丸の子孫はパラ州には2家族のみが在住する。

私は幼少の頃より高校・大学に至るまで「日本で学ぶ」ことが夢であり、小中学校時代はとにかく自宅や友人宅にあった「一年生」や他の雑誌、漫画等に夢中になって時が過ぎた。読書の習慣が自然につき、パラ大学卒業後は大阪大学環境工学博士前期課程を専攻すべく訪日し、夢が叶った。研究テーマは「ブラジル俳句における環境像に関する考察」であり、平日は研究に励み、余暇には日本各地にある松尾芭蕉の句碑を一人見学するという風変わりな日々が卒業まで続いた。

ブラジル帰国後、在ベレン日本総領事館の広報文化班にて勤務し始め、現在に至る。途中、地元アマゾン大学新聞学科を卒業。相変わらず、「ポルトガル語がお上手ですね」と言われる場面に遭遇し、苦笑いで済ませる場合が多くあるが、「実はブラジル生まれです」と説明する時もあり(笑)。地元「風みどり俳句会」でも日本語の勉強を継続中。趣味はカメラと旅。一時期は、上記日伯協会会報のポルトガル語版を担当し、アマゾンでテーマにした雑誌「アマゾン・チビカ」も編集・発行。

思えば、両親や身近な人々の計らいのお蔭で今に至る。感謝の気持ちでいっぱいだ。

ジャーナリストの旅路

世代交代に想う日系人との絆

本間圭一
(読売新聞東京本社 編集局国際部記者)

ブラジルを最初に訪れたのは22年前になる。日本に出稼ぎに来ていた日系人の取材で、彼らの出身国を訪ねた時だ。記者をしていると、取材対象に猛烈に心を動かされることがある。この時がその一つだった。天皇、皇后両陛下(当時)がブラジルを訪問されていた時期と重なり、両陛下が日系人との対話集会に出席されると聞き、会場となったサンパウロのイビラプエラ体育館に立ち寄った。

歌曲「荒城の月」とともに、両陛下が入場すると、館内を埋め尽くした1万人の日系人から大きな歓声があがった。

〈移住者の長年にわたる並々ならぬ努力により、現在、日系の人々がブラジルの社会で信頼され、高い評価を得ていることを喜ばしく思います〉

天皇陛下がマイクを通じて、そう語られると、むせび泣く声があちこちから聞こえた。その多くは、戦前・戦後の貧しい日本を飛び出し、ブラジルに移住した日系1世だ。コーヒー農場で一旗揚げ、数年で祖国に錦を飾るという夢は実らず、苦しい生活が帰国を遠ざけた。両陛下の姿に祖国を思い浮かべ、激しく嗚咽する老人を前に、目頭が熱くなり、カメラのシャッターを切れなくなった。

その後のブラジル駐在では、多くの1世の皆さんに助けら

れた。ポルトガル語の分からない筆者の通訳を務めてもらったり、政府や経済界の要人を紹介したりしてくれた。祖国から遠路やって来た同胞に対する日系人の親切と思いやりは、ブラジル訪れた日本人なら誰しも経験したことだろう。

月日は流れ、ブラジルを最後に離れてから15年がたつ。日々の雑務に追われ、再訪問の機会を逸する中、最近、日本人と日系人との関係が希薄になっていると聞いた。ブラジルの日系人は200万人に達し、6世まで登場したが、1世や2世が次々に他界し、減少しているためだという。

日系人に日本語で情報を提供した「サンパウロ新聞」が最近廃刊となり、73年間の歴史に幕を閉じたのも、日本語を読める読者の減少が原因だったようだ。日本に働きに来る日系人も減少傾向だ。法務省によると、在留ブラジル人は2017年末時点で19万人余で、2007年比の4割減となった。世代が進むほど、日本は特別な国ではなくなる。

天皇、皇后両陛下は今年、上皇ご夫妻になられた。時の流れを感じる。やがて、1世や2世は表舞台から去り、日の丸を見て母国を思う日系人はいなくなるかもしれない。だが、日本の財産とも言える世界最大の日系人社会との絆を保てないものかと願う。

“ボサノヴァの神様”の死とドキュメンタリー映画 「ジョアン・ジルベルトを探して」

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

天才的ギター奏者にしてボサノヴァの“生ける神様”ジョアン・ジルベルト（本名：ジョアン・ジルベルト・ド・ブラード・ペレイラ・デ・オリヴェイラ）が7月6日リオの自宅で亡くなった。享年88歳。

ブラジル音楽界の偉人が他界したということで、世界中のメディアが大きく報道したのは当然だが、日本のメディアにも多くの文化人の追悼文が掲載されていた。筆者が目を通したものだけでも列記すれば、中原仁（日本経済新聞、7月9日）、国安真奈（朝日新聞、7月11日夕刊）、宮沢和史（朝日新聞、7月14日）、中村善郎（読売新聞、7月30日）、岩切直樹／岸政彦（月刊『ラティーナ』8月号）、片山杜秀（週刊新潮8月8日号）、といった方々が心のこもった追悼の文章を寄稿していた。なかでも宮沢和史の文章のラスト「リオを越え、バイアを越え、ブラジルを越え、トン・ジョピンとヴィニシウス・ヂ・モライスらと共に生み出したジョアン・スタイルの名曲の数々は今現在もこの星のどこかで一日も、1時間も途切れることなく誰かに演奏されていることだろう。だから、僕は寂しくない。」には素直に感動してしまった。詩人的センスを有するミュージシャン宮沢らしい文章を無言で沈吟することになったからだ。

朋友アントニオ・カルロス・ジョピン（1927-1994）が作曲しジョアンが演奏した「Chega de Saudade(想いあふれて)」(1958年)をもってボサノヴァの嚆矢とする、というのが定説であるが、ボサノヴァ（新しい傾向の意）という音楽新潮流が国際的に認知されるようになったのは、1963年米国のスタン・ゲッツと共演し、夫ジョアンよりも英語の発音がよかったアストラッド・ジルベルトが歌った、英語版アルバム「イパネマの娘(The Girl From Ipanema)」がヒットしたおかげである。ポルトガル語版「Garota de Ipanema」は英語版の後塵を拝したワケであり、ジョアンもしばらくは活動拠点を米国に置いていた。すなわち、リオで創出されたボサノヴァが国際的に広まったのは、米国の音楽市場と米国に追いついた日本市場のおかげであった。

大都市リオ（当時はブラジルの首都）の中産階層に属する高等遊民的な若者たちによって生み出されたのがボサノヴァであったが、彼らのなかで一人例外的だったのが、バイア内陸部の田舎町ジュアゼイロで生まれ育ったジョアンだった。彼は、生まれ故郷から脱出したばかりでなく出身地の田舎を切り捨て、大都市文化に自らを染めあげる選択をしたアーティストであった。このファクトを突きつけられたのは、筆者が1990年代の数年間、ジュアゼイロの隣町にして双子都市ベトロリーナで駐在

していた時だ。というのもジュアゼイロ中心街にある州立文化センター（正式名：ジョアン・ジルベルト・文化センター）がジョアンに敬意を表して1986年に設立されたのだが、この劇場でジョアンが演奏したことなんか一度もない、彼はジュアゼイロを捨てたんだ、と地元住民から何回も“苦情”を聞かされたからだ。

そんな現地体験もあってジョアンの音楽にイマイチ没入できなかった筆者が、ジョアン崇拝主義者に転向したのは、2004年10月、東京国際フォーラムにおけるライブ公演を体験したからだ。あの3時間に及ぶ、途中休憩なし、但しジョアンのフリーズ（沈黙考？）は20分以上あり、の特別な時空間は、その場にいないと理解できないだろう。ジョアン奏法とでもいえるギターさばき、あの声量をセーブしたヴォーカルの魔力に会場にいた聴衆全員が心を奪われたといっても過言ではない。リオの自宅マンションに引きこもっている変人かもしれないが、天才的ミュージシャンだ、というのが筆者のジョアン像となったのだ。

そんなジョアンを追い求める音楽ドキュメンタリー映画「ジョアン・ジルベルトを探して」が日本でも8月末に一般公開される。

そのあらすじをざっくりと追うと、2008年のコンサートを最後に公の場に現れないジョアンを逐一探し求めたドイツ作家の著書を読んで感激したジョルジェ・ガシヨ監督は、その著作に出てくるジョアンゆかりの地を訪ね、関係者を取材していく。元妻ミウシャやジョアン・ドナート、メネスカル、マルコス・ヴァーリといったミュージシャンたちはもちろん、彼の散髪担当の理髪師、料理を届けるコックといった関係者も登場し彼らの証言を主体に構成されていく、なんとも魅力的な音楽ドキュメンタリー映画だ。ミウシャがジョアンと携帯電話でコンタクトしているシーンは今ではとても貴重な。彼女も昨年12月に亡くなってしまったからだ。



EU メルコスール FTA

6月28日、伯外務省、経済省及び農務省は、EUメルコスールFTA交渉が完了した旨の共同プレスリリースを発売した。概要以下のとおり。

1. 6月27～28日にブリュッセルで開催された閣僚会合において、EUメルコスール連携協定の貿易部分に係る交渉が完了した。伯からは、アラウージョ外相、クリスチーナ農相、トロイジョ経済省貿易国際問題担当次官が出席した。
2. 同協定は、EUメルコスール関係における歴史的な枠組みである。両ブロックは、世界のGDPの約25%を占め、7億8千万人の市場を有する。世界の貿易に緊張と不安定がある中、同協定の交渉完了は、両ブロックによる経済開放及び競争力の強化へのコミットメントを示す。
3. (メルコスールと)EUとの貿易協定は、世界最大級の自由貿易圏を構成する。その経済的重要性及び規律の包括性により、過去にメルコスールが交渉した協定の中では最も広範で複雑である。同協定は、関税及びサービス、政府調達、貿易円滑化、技術的障害(TBT)、衛生植物検疫措置(SPS)、知的財産等に係る規律を対象とする。

4. 同協定が発効すれば、伯の大きな関心分野の農産品(オレンジジュース、果物、可溶性コーヒー)にかかる関税は撤廃される。伯輸出企業は、輸出枠により、食肉、砂糖、エタノール等に係るアクセス拡大を得る。伯企業は、全ての工業製品にかかる関税の撤廃から恩恵を得る。このように、(伯企業の)競争条件は、EUが既にFTAを締結している他のパートナーと対等なものとなる。

5. 同協定は、カシャッサ、チーズ、ワイン、コーヒーといった多様な産品を伯特有のものとする。

6. 同協定は、以下の様々なサービス分野への効果的なアクセスを確保する。それは、通信、建設、流通、観光、運輸、自由職業、専門的サービス、金融サービスである。政府調達については、伯企業は、1.6兆米ドルを見込むEUの入札市場へのアクセスを得る。また、物品の輸出入手続が迅速になり、手続にかかるコストが削減される。

7. 伯経済省の試算によればEUメルコスール協定により、15年間で伯のGDPが875億米ドル増加し、非関税障壁の削減及び生産性の向上を考慮した場合、1,250億米ドル増加する可能性がある。伯への投資は、同期間に1,130億米ドル増加する見込み。伯の対EU輸出額は、2035年までに約1,000億米ドルとなる。

キャンパス・コラム

ベネズエラからの「留学生」

塚本一馬
(神戸外語大4年生)

私はミナスジェライス州ジュイスデフォーラにあるジュイスデフォーラ連邦大学(UFJF)で1年間の留学生生活を過ごした。ジュイスデフォーラはリオデジャネイロからバスで3時間と地理的に近く、カリオカ訛りのポルトガル語を聞くことが多い。文化的にもカリオカの影響が強いと言われ、リオのサッカーチーム特にフラメンゴのファンが多い。歴史的にはイタリア、ドイツ系移民を受け入れてきたので、イタリア系やドイツ系移民の名残が街中で見られる。ピザ屋が多いのはイタリア系が多いからという冗談をイタリア系のホストファミリーから耳が腐るほど聞いた。またイタマルフランコ元大統領が育った街としても知られている。最近ではボルソナーロ現大統領が選挙キャンペーン中に刺された街としてニュースとなった。普段はそんな物騒な事件など無く、非常に住みやすい街だ。

UFJFでは留学生に対しても全ての授業が受講可能となり、質の高い教育を受けることができる。またUFJFは国際性豊かな大学であり、教授、学部生、院生が世界中から集まっている。ギニアビサウ出身の先生によるブラジル経済の授業では多くを学んだ。また大学では外国

人向けポルトガル語の授業が開講されており、自然と留学生同士で仲良くなる。優秀な留学生の中でも特に印象に残っているのがベネズエラからの留学生である。彼らは学部留学をしに来たと言って自己紹介をしたが、中には観光ビザでブラジルに入国し学生ビザの取得を目指している方もいた。少なからずベネズエラで何が起きているかを知っていたので色々聞きかかったが、彼らから話すことはなかったから私から質問することは控えた。彼らは決して自分達のことを難民と呼ばなかったことが印象に残っている。そもそも私は彼らのことを難民と呼んで良いのか分からない。ベネズエラの国境から遠く離れたジュイスデフォーラで難民の方々と会うとは留学前に考えてもいなかった。日本に帰国してからもベネズエラのニュースを見かけると彼らのことを思い出す。ニュースで見る世界の社会問題が身近に感じる瞬間でもある。SNSを見る限り彼らはまだジュイスデフォーラに住んでUFJFの学部で勉強をしているようだ。彼らの留学生活が終わりを告げ母国に帰れる日が1日でも早く訪れることを願っている。

新刊書紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『移民と日本人』(深沢正雪著)

ブラジル移住史には日本史の「B面」が刻まれていると考える著者は、「日本移民は壮大な民族学的な実験だ」という先輩記者の言葉を反芻しつつ、ブラジル移民の歴史的ファクトを読み込んでいく。農家の次男三男ばかりでなく、かくれキリシタンがルーツの連邦下院議員、大正デモクラシーの流れをくむアリアンサ移住者、明治天皇の孫であった元皇族、もいれば、部落出身者もいたものであり、「なんでもあり」の日系社会を形成していったのだ。(無明舎 2019年6月 174頁 1,800円+税)

『ブラジル黒人運動とアフリカ』(矢澤達宏著)

欧州や米州における黒人意識運動としてパン・アフリカニズムやネグリチュードが20世紀前半に展開された

が、世界最大の黒人奴隷輸入国であったブラジルは、「黒人大国」でありながらこうした運動にほとんど関与していない。何故かと疑問を抱いた政治学者が、ブラジル史を読み込み、20世紀前半のサンパウロにおける黒人運動や黒人新聞の事例研究を深耕しながら、「アフリカ性」のブラジルのジレンマを読み解いていく。好著にして力作だ。(慶應義塾大学出版会 2019年6月 256頁 5,000円+税)

『CIMARRON』(シャルル・フレジェ著、神奈川夏子訳)

シマロンとは逃亡奴隷のことだが、南北アメリカ大陸に生きるアフリカ系や先住民の子孫たちが引き継ぎ、今に伝える「自由と混淆の仮装100」を写真家シャルル・フレジェが記録した、貴重な民族誌的写真集だ。ブラジルからは、カンドンブ(バイアー)、カヴァーリョ・マリーニョ(ペルナンブーコ)、マラカトゥ・フラル(ペルナンブーコ)、ブンバ・メウ・ポイ(マラニョン)、レイザド(バイアー)などが収録されている。(青幻舎 2019年3月 320頁 3,800円+税)

『世界の書店を旅する』(ホルヘ・カリオン著、野中邦子訳)

スペインの作家(1976年生まれ)による、欧米各地の書店巡り紀行といえる秀逸なエッセイ集。ツヴァイクの短編『書痴メンデル』から語り始め、1732年開業と“世界最古の書店”といわれるリスボンのベルトラン書店や、「世界で最も詩に謳われた書店」である、リオの老舗レオナルド・ダビンチ書店への思いを語り、サンパウロのサライバ書店、クルツォラ書店にも作家リスペクトール作品にもふれている。本屋好きは大いにコーンする著。(白水社 2019年6月 340頁 3,200円+税)

『日本とブラジルからみた比較法』(柏木昇・池田真朗・北村一郎・道垣内正人他編集)

二宮正人教授の古稀を記念して編纂された特別論文集。日本法関連で10論稿、ブラジル法関連では5論稿、比較法関連では10論稿が収められ、最終章が、二宮教授による「国籍法研究とブラジル・日本」となっている。論じられている国は日本、ブラジル、ペルー、ロシア民法典、国際人権法というように、まさに地球規模の論集であり、日伯両国で、弁護士・大学教授・名通訳・翻訳家として八面六臂の活躍をされてきた二宮教授らしい巨著だ。(信山社 2019年7月 662頁 17,800円+税)



価値を生み出す厳選された情報

中南米経済速報

経済情報を毎週月曜日にお届けします。地域経済圏の動き、インフラ整備やエネルギー・資源開発、各国のマクロ経済、投資案件、労働問題などを日本語でお読みいただけます。

■購読料: 14,000円/月(税別)

CRONICA (クロニカ)

政治・治安情報を速報でお届けします。月～金に速報版を、火・金にレギュラー版を配信します。社会情勢、犯罪情報、武器密輸、麻薬問題、自然災害などを取り扱います。

■購読料: 30,000円/月(税別)



有限会社イスパニカ

〒107-0052 東京都港区赤坂2-2-19 アドレスビル
Tel. 03-5544-8335
Fax. 03-5544-8336
Email: hola@hispanica.org

通訳・翻訳、語学研修もっております

「イスパニカ」で検索!



!!「ブラジルあれこれ」!!

BRAZIL IS NOT FOR BEGINNERS

大学や企業でブラジルのことを話す機会がある。話した後で感想を聞いてみると、たいていは、カーニバルの国やサッカーの国といったステレオタイプのブラジル観を持っていたが、ブラジルのその他の面を知りブラジルの多様性を感じたというものが多い。

確かに、カーニバルを楽しむ人が多い一方で、カーニバルを避けて海外に滞在する人はけっこう多いし、サッカーに関心がないという人も数多い。最近では、日本国内でもシュラスコが人気だが、ブラジル人は肉ばかりを食べているわけでも当然ない。アマゾン地方に行けば、かつて京都の有名料亭の若手料理人をうならせた魚料理もある。

冒頭のフレーズはブラジル音楽の巨匠アントニオ・カルロス・ジョビン(ANTONIO CARLOS JOBIM)が述べたということになっている。ジョビンは、特に外国人に対して、「ブラジルには難しいところがあり、ステレオタイプの見方ではわからない。」と言いたかったのだろう。例えば、どうしてサンパウロ州知事や市長のようなリーダーが公の場でジーンズを着用しているのか、その背景を理解しないとビジネスを行う上でも損をする。ある経営コンサルタントが、「日本のビジネスマンは服装にしても態度にしても硬すぎる。ブラジルではインフォーマルであることが重要で、インフォーマルなスタイルで仲良くなれば、ビジネスもスムーズに行く。」というのを聞いたことがある。

ボサノバ関係の著作も多いジャーナリストのルイ・カストロ(RUY CASTRO)は、2008年3月22日のフォーリャ・デ・サンパウロ紙のコラムでこのフレーズを取り上げている。コラムでは、ジョビンは、1961年に発売された本「初心者のためのブラジル(BRASIL PARA PRINCIPIANTES)」をもじってこのフレーズを述べたとしている。本の著者は、ハンガリー人のピーター・ケルメン(PETER KELLMEN)で、外国人の目から見たブラジル、特にブラジルで生活していくに際し遭遇する、とるに足りない悪行やいかさまなどについても辛らつに描いていた。当時の有力出版社(EDITORIA CIVILIZAÇÃO BRASILEIRA, RIO)から発売されたこの本は、外国人による生々しいブラジル描写をめぐり激しい怒りと反発を呼び起こしたが、反発していた人々も含め数万人が本を購入した。ケルメンは、本を出版後カルネ・ファルトゥーラ(CARNÊ FARTURA)という一種の富くじを全国で販売し、莫大な富を築いたが、購入者にほとんど還元されないまま倒産、手に入れた資産を携えてボリビアに逃亡した。初心者のブラジルを手玉に取った格好だ。

カストロは、「それでもジョビンのフレーズが意味を失うことはない。麻薬の密売人が自ら麻薬を嗅いだり、右派が自身の権力を維持するために左派の為政者を擁立するような国ブラジルは、確かに初心者や原理・原則の人向きではない。」と結んでいる。(MK)

日本ブラジル中央協会 — イベントのご案内 & お知らせ —

HPの申込みフォームからお申し込み下さい。
<http://www.nipo-brasil.org>

皆様のご入会を心よりお待ちしております

法人・個人・学生 新規会員募集中

会員数 法人会員 123社 (2019年8月現在) 個人会員 約390名

当協会の活動目的「日本・ブラジル間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける法人・個人の皆様に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

- 協会会報「ブラジル特報」の無料配布 隔月発行、年6回配布。
- 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます(会員限定イベントへも参加いただけます)
- 会員交流懇親会へ参加いただけます
- ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円 (2口以上) (1口以上)
※入会金は不要です

お申し込み

QRコード: <http://www.nipo-brasil.org> 日本ブラジル中央協会 検索

イベントのご案内

9/10 在サンパウロ 古杉征己弁護士 ランチョン・ミーティング
演題: 「訴訟案件への対応から危機管理へ〜ブラジル法弁護士活動二年」
日時: 2019年9月10日(火)
場所: シーボニア・メンズクラブ 千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル1F
参加費: 会員 2,500円、非会員 3,500円

9/24 ブラジル人事制度(評価制度等)についての少人数セミナー
講師: 伊藤由香里 (東京コンサルティングファーム 横浜支社 アシスタントシニアコンサルタント)
日時: 2019年9月24日(火)
場所: 日本ブラジル中央協会 会議室
参加費: 会員 2,000円 / 定員: 10名
受講対象者: 当協会の法人会員で、ブラジル進出中・または進出を検討中の企業の方

9/28 ブラジル 駐在員家族(駐在妻)のための渡航前セミナー
限定8~9名の少人数での開催。新生活にむけて「どれくらい準備している...?」
日時: 2019年9月28日(土)
1部: 9:15-12:30 (3時間15分) 対象者: 渡航されるお子様なし
2部: 14:00-18:00 (4時間) 対象者: 渡航されるお子様あり
場所: 日本ブラジル中央協会 会議室

10/10 竹下幸次郎 拓殖大学 准教授 講演会(予定)
演題: 「ブラジル経済情勢」(仮題) ※詳細は追ってHPにてご案内します。
日時: 2019年10月10日(木)15:00~
場所: 新橋ビジネスフォーラム 港区新橋1-18-21 第一日比谷ビル8階

10/12 第4回 ブラジル料理教室(ブラジルのおつまみ料理)
講師: 平田マリ氏 ※詳細は追ってHPにてご案内します。

ジルソン・マルチンス 日本初上陸

ブラジル、リオデジャネイロの人気バッグブランド
ジルソン・マルチンスが日本初上陸!



ジルソン・マルチンスの商品は直営店または
ウェブショップにてお求めいただけます。



ウェブストアのご注文はこちらから!
online shop.
<https://shop.coloridas.jp>



coloridas SHOP Aoyama
東京都渋谷区神宮前 3-38-11
原宿ロイヤルビル 1F 2号室
営業日: 火~土 13:00~19:00 (日・月曜 定休日)

coloridas
ジルソン・マルチンス日本輸入総代理店
東京都渋谷区神宮前 3-42-11 ローザビアンカ 201
コロリーダス株式会社
MAIL: bio@coloridas.jp TEL: 050-5585-1090
WEB: <http://coloridas.jp>

**39年間
南米一筋**

驚き! 感動!!

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業 1979 年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。
航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社: ユナイテッド航空、デルタ航空、アメリカン航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、イベリア航空、ブリティッシュ・エアウェイズ、ターキッシュエアラインズ、エミレーツ航空、カタール航空、アエロメヒコ航空、ラタム航空、ニュージーランド航空、アルゼンチン航空、ゴル航空、コパ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館 (東京、浜松、名古屋) の登録業者です。
観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輛の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル
(本社) 東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階

観光庁長官登録旅行業 第1835号
社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員
TEL: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540

アルファインテル

いいね! e-mail: info@alfainter.co.jp



ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を

ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia(ブレイジア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。



BrAsia (ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL: 03-6263-0716

お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

